様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４４６３

研究課題名（和文）初年次セミナー受講生の「ふりかえり」を基盤とした学習支援のあり方に関する研究

研究課題名（英文）Learning Assistance Programs for More Students to Use: Based on Analyses of Weekly Journal Entries of First Year Seminar Students

研究代表者
加藤　善子（Kato, Yoshiko）

信州大学・学術研究院総合人間科学系・准教授

研究者番号：９０４３４９６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、初年次生の経験とニーズを体系的に把握することで、より多くの学生が学習支援を利用するしくみの構築を目指した。初年次生を支えるためのIRも財政基盤もなく、教員に負担が集中する状況を前提とすると、初年次生が参画し、間違いなく単位を取るための行動を取るしくみは、①正課の授業と連動し、②必要な時に必要とされる支援を用意すること、③支援対象を特定しないこと、④学習支援を利用する「行動」を評価すること、の4点である。これらをすべて取り入れた初年次セミナーでは、受講した学生が不受講群に比べて、初年次の成績が一科目あたり平均で2点高く（有意差あり）、成績下位群では受講群の4年卒業率が有意に高かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の意義は、アメリカのようなIR体制も専門職員の配置もない日本で、どの初年次生がどのようなニーズを持っているか把握できない状態でも、学習支援と正課授業を連携させ、ピンポイントで支援を提供すれば、十分に効果を期待できる学習支援体制が可能であることを示した点である。これを可能にするには、正課授業で課題を科す際に、学習支援も同時に提供することであり、学生が学習支援を利用した行動が評価される仕組みがなければならないが、授業デザインや学習支援に関する研究は発展しており、後は学内におけるFD活動や、部局間の効果的な連携によって、十分に実現可能であると言える。

研究成果の概要（英文）：　Even though we don't have IR or sufficient budget to support the first-year students to make smooth transitions, as long as we structure the students' first-year " experience" and their needs, we could make more students to use learning assistance and to succeed. This project shows that students are more likely to use learning assistance when 1) a coursework incorporates learning assistance as its learning activities, 2) specific learning assistance is ready for them to use as they need it, 3) it welcomes anyone, and does not stigmatize the users, and 4) students' action to visit and use the assistance is to be evaluated. Our first-year seminars that have this system successfully had 90% of the students use our learning assistance programs. As a result, they turned out to make better grades and graduate in 4 years than those who didn't take one.

研究分野：教育学、初年次教育、教育社会学

キーワード：学習支援　初年次教育　学士力　教育の質保証

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

学生の多様化が進み、教育の質保証が求められるようになる中、大学への運営交付金は削減され、教員への負担は増す一方であった。初年次教育と学習支援は、どちらも大学生が主体的な学びを身につけるために重要であるという認識はあったものの、効果的で効率的な実施方法は未だに模索されていた。そこで、日本における初年次教育や学習支援をめぐる状況を米国と比較することで明らかにし、日本の初年次生が置かれている状況を分析・把握し、日本において実現可能な解決策を見出そうとしたのが本研究の始まりである。

本研究の開始時点では、初年次教育はすでに 84%の国公私立大学で実施されるまでになっていたが、その内容は各大学の教育目標の達成に直結して意図的・包括的にデザインされてはいなかった。2 年次移行の教育目標との連続性を論ずる研究は少なく、その効果測定も成績や学習成果との観点から実施されているものはなかった。一方で、成績や学習成果に関する研究は、リメディアルや学力不足問題に集中しており、初年次教育とは別の文脈で論じられて、効果の出ないことが課題となっていた。

２．研究の目的

本研究は、初年次教育と学習支援を同一の文脈で扱うことを狙い、初年次生が一学期間に直面する課題やニーズを体系化し、必要な支援を必要な時期に適切な方法で提供するための包括的な初年次教育を含めた学習支援モデルを構築することを目的とした。その際、教員が世話を焼くのではなく、学生が自分自身で努力するしくみの構築を作ることが重要であると考えた。

３．研究の方法

本研究では、①初年次の「経験」の実証的構築、②学修支援プログラムの調査・研究、③日本における包括的初年次教育のモデル化、の 3 段階を踏んで進めた。①初年次の「経験」の実証的構築では、信州大学の初年次セミナーである「大学生基礎力ゼミ」で学生に毎週課す「ふりかえり」を分析することで、初年次に学生がいつどのような課題に直面しているのかを抽出した。あわせて、信州大学で提供している学修支援プログラムの利用状況やアンケート結果を、大学生調査と照合しながら分析した。②では、文献調査に加えて、アメリカで効果をあげているサプリメンタル・インストラクションのスーパーバイザー養成研修に参加し、そのプログラムがなぜ効果的かを学んだ。同時に、日本において先進的な取り組みを進めているラーニング・コモンズや学修支援プログラムの視察を行った。これらをすべて総合して理論的に考察し、学生に使われる効果的な学修支援モデルを構築した。

４．研究成果

本研究は、初年次生の経験とニーズを体系的に把握することで、より多くの学生が学習支援を利用するしくみの構築を目指した。初年次生を支えるための IR も財政基盤もなく、教員に負担が集中する状況を前提とすると、初年次生が参画し、間違いなく単位を取るための行動を取るしくみは、①正課の授業と連動し、②必要な時に必要とされる支援を用意すること、③支援対象を特定しないこと、④学習支援を利用する「行動」を評価すること、の 4 点である。これらをすべて取り入れた初年次セミナーでは、受講した学生が不受講群に比べて、初年次の成績が一科目あたり平均で 2 点高く（有意差あり）、成績下位群では受講群の 4 年卒業率が有意に高かった。

これらの実践研究を、教育の質保証の観点から、リメディアル教育と同じ文脈に置き、成果発表するべく、シンポジウム「学生に届く学習支援」を開催した。プログラムは、基調講演①「組織として学生を支援するには–学士力を支える学習支援–」（四国大学短期大学部教授・谷川裕稔氏）、基調講演②「認証評価から見た学修成果–大学卒業時に求められる力とは–」（東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授／大学改革支援・学位授与機構客員准教授・野田文香氏）、実践紹介「信州大学の学習／学修支援プログラムとその成果」（「ピアサポ@Lib」スタッフ）である。学内外から教職員が集まって、議論も活発に行われ、盛会であった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　7　件）

1. 加藤善子・森いづみ・後閑壮登・正武田敦巳・勝木明夫・高野嘉寿彦（2019）「学習支援における図書館の役割を考える―学習支援プログラムの統合を通して―」『信州大学図書館研究』第 8 号，pp.175-185.
2. 加藤善子・井下千以子・谷川裕稔・野田文香・古里由香里（2019）「学習支援を学修成果に結

びつけるための設計と運営」『大学教育学会誌』第 40 巻 2 号，pp.99-102.
3. 加藤善子・李敏・古里由香里・加藤鉱三（2018）「学修支援を組み込んだ初年次セミナーの意義―初年次生のニーズを早期に把握し、移行を支える試み―」『大学論集』第 50 集，pp.129-143.
4. 古里由香里（2018）「初年次セミナーが留年・休学・退学に及ぼす効果―『大学生基礎力ゼミ』を事例にした計量分析―」『信州大学総合人間科学研究』第 12 巻，pp.90-102.
5. 加藤鉱三・加藤善子（2017）「サプリメンタル・インストラクションの思想と設計–授業担当教員に負担を強いない学習支援プログラム–」『信州大学総合人間科学研究』第 11 巻，pp.251-257.
6. 古里由香里（2017）「大学生の学修場所パターンに関する分析―潜在クラスを用いた計量的アプローチ―」『信州大学総合人間科学研究』第 11 巻，pp.91-106.
7. 小島浩子・福澤しのぶ（2017）「広島大学・神戸大学附属図書館訪問調査報告」『信州大学附属図書館研究』第 6 号，pp.183-188.

〔学会発表〕（計　2　件）

1. 加藤善子・井下千以子・谷川裕稔・野田文香・古里由香里「ラウンドテーブル 10 学習支援を学修成果に結びつけるための設計と運営」大学教育学会第 40 回大会、2018 年 6 月 9 日、東北大学。
2. 加藤善子・李敏・加藤鉱三「学修支援の理論と実践、およびデータとの対話―信州大学における試み―」高等教育学会第 20 回大会、2017 年 5 月 27 日、東北大学。

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
1. シンポジウム「学生に届く学習支援」開催案内（2018 年 10 月 19 日、於：信州大学）
http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/news/2018/09/post-209.php

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：加藤 鉱三
ローマ字氏名： Kozo Kato
所属研究機関名：信州大学
部局名：学術研究院総合人間科学系
職名：教授

研究者番号（8 桁）：20169501

研究分担者氏名：李 敏
ローマ字氏名：Min Li
所属研究機関名：信州大学
部局名：学術研究院総合人間科学系
職名：講師
研究者番号（8 桁）：30531925

研究分担者氏名：古里 由香里
ローマ字氏名：Yukari Furusato
所属研究機関名：信州大学
部局名：高等教育研究センター
職名：助教
研究者番号（8 桁）：20793095

(2)研究協力者
研究協力者氏名：小島 浩子
ローマ字氏名：Hiroko Kojima
研究協力者氏名：福澤 しのぶ
ローマ字氏名：Shinobu Fukuzawa
研究協力者氏名：後閑 壮登
ローマ字氏名：Masato Gokan
研究協力者氏名：正武田 敦巳
ローマ字氏名：Atsumi Shobuda
研究協力者氏名：武田 佳代
ローマ字氏名：Kayo Takeda
研究協力者氏名：森 いづみ
ローマ字氏名：Izumi Mori

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。